

エコロジカルな知覚理論（染谷バージョン）への 質問と批判的検討¹

小草 泰
（慶應義塾大学）

染谷昌義氏（以下、敬称略）の著書『知覚経験の生態学——哲学へのエコロジカル・アプローチ』は、ジェームズ・ギブソンに始まるエコロジカルな知覚理論の枠組みに依拠しつつ、ときにはギブソン以上にギブソンの知覚観を提示する形で、知覚にまつわる根本的な哲学的・心理学的諸問題に取り組んだ力作である（以下では、同書を「本書」と略記し、引用や参照の際は頁数のみを記す）。以下では、まず、本書について、ギブソン流の知覚理論に親しんでいない（いわゆる分析哲学に属する知覚の哲学を専門とする）私の観点から、その知覚観の基本アイデアに関する疑問点（私がうまく消化できていない点）をいくつか挙げる（1節）。その目的は、批判というよりは、さらなる説明・解明の要求である。次に、もう少し論戦的なスタイルで、染谷の提起する「知覚は誤らない」というテーゼと、それを支持する議論についての批判的検討を行う（2節）。

1. 第三章「直接知覚説」に関する疑問

本書の第三章では、エコロジカルな知覚理論が一種の「直接知覚説」として提示さ

1. 本稿は、2017年3月25日に東京大学本郷キャンパスで行われた、フッサール研究会シンポジウム「知覚は誤らないのか——エコロジカル・アプローチをめぐって」における発表原稿に若干の修正を加えたものである。シンポジウム提題者の染谷昌義氏、葛谷潤氏、司会者の富山豊氏、そして質疑応答に参加された方々に感謝したい。なお、当日の染谷氏（や他の方々）との質疑応答を通じて、私が以下で挙げる疑問などに関してすでに明らかになった点もあるのだが、本稿の内容は基本的に当日の原稿に基づいたものとなっている。

れ、その概要とメリットが説明されている。その知覚観のエッセンスは、ここで問題にしたい点だけに絞ると、以下のようになると思われる。

- ① 「エコロジカル情報」という、それ自身で環境内のありようを特定するのに十分な（志向性を備えた²⁾）存在者が、主体から独立に環境のうちに実在している。

たとえば、環境内のある一点（潜在的な観察点）に向けて周囲から収束する光線の集まり（「包囲光」）のうちには、周囲にある物の表面が形成するレイアウトを特定するのに十分な構造が保存されており、したがって、その光線の集まりは、（脳や心のうちで加工されることなく）、それ自身で、周囲のありように関する「情報」となっている。

- ② 主体が環境内のありようを知覚するとは、主体がそれらのエコロジカル情報をただ「ピックアップする」ということである。主体の心や脳のうちで、情報が加工・処理されたり、表象が形成されたりする必要はまったくない。

旧来の（そして、現在の哲学や心理学でもしばしば継承されている）知覚観によれば、知覚は、まず、環境のありようを特定するのには不十分な、貧しい刺激が感覚器官に与えられ、その後、主体の脳や心のうちで行われる「推論」なり「構成」なりを経て、客観的世界に関する「表象」が形成されることとして捉えられる。これに対して、エコロジカル・アプローチでは、表象に相当するものがあらかじめ環境内に実在しており、主体は、それを単に拾い上げさえすればよいとされるのである。

以上の「直接知覚説」は、私にはあまりなじみのない用語や概念装置を用いて提示されており、そのために、私にはまだよくわかっていない点がある。そこで、私にとってなじみのある問題設定にも依拠しつつ、それらの点を確認させてほしい。

2. 染谷は、エコロジカル情報の存在を認めることによって、「志向性の自然化」が可能になると主張している（p. 55）。しかし、それと同時に、エコロジカル情報が環境のありように関して間違いうることを否定しているようにみえる（p. 304）。しかし、標準的な考え方によれば、志向性にとって誤りの可能性は本質的な特徴の一つであるから、エコロジカル情報という存在者が、ほんとうに志向性の自然化を可能にするものなのか（あるいは、志向性にとって代わる別の何かとみなされるべきなのか）については検討の余地があると考えられる。

1.1 ピックアップとは何か

私の疑問は、まず、「ピックアップする」というのは、ということなのかに関わる。この点に関する染谷の論述はあまり豊富ではないように私には思われる。ともかく、主体（の脳）が「計算」を行ったり「表象」を形成したりする必要はないというネガティブな主張ははっきりしているが、ではピックアップとは積極的には何なのかということについては、多くは語られない印象がある。確かに、主体が情報をピックアップするためには、主体による身体的な探索や調整が必要である点は強調されている。しかし、他方で、ピックアップの「心的」ないし「認知的」な側面について語ることは極力回避されているようにも見える。しかし、後者に関する説明がなければ（あるいは、もしピックアップにはそのような側面はないということであれば、そう明言しなければ）、結局のところ、エコロジカル・アプローチがいかなる知覚観を提示しているのかははっきりしないのではないだろうか。「ピックアップ」に関する疑問をもう少し具体化すると、次の二つにまとめることができる。

- （１） 情報のピックアップには、主体側の「理解」や「知識」のようなものは必要なのか。
- （２） ピックアップは、主体自身が情報に意識的に気づくことを含むのか、そうでないのか。

（１） についてももう少し説明する

「エコロジカル情報は、それ自身で、環境内のレイアウトなど、環境のありようを特定するのに十分な志向性を備えたものであるから、主体は、ただただそれをそのまま受け取るだけでよい」というような考え方が強調されている。しかし、一般に、環境内にある情報とそれが関わる事物の間にどれだけしっかりした（志向的、ないし特定の）関係があるとしても、主体がその情報によって何事かを見て取るには、主体が情報を情報として利用できることが必要であり、そして、そのためには、主体の側に関連する何らかの理解とか知識のようなものが必要なのではないかというふうにも思われる（それらの「知識」や「理解」は、いわゆる「概念的」なものではないかもしれないが³⁾）。たとえば、年輪と樹齢の間には、前者が後者を特定すると言えるような表象的關係があるとしばしば言われるが、しかし、私が年輪を用いて樹齢を知ることができるためには、私が両者の関係についてしかるべき知識や理解を持って

3. 問題の理解や知識は、身体的な技能と結びついた一種の実践的知識なのかもしれない。

いることが必要であるように思われる。これと類比的に、エコロジカル情報というものがもし本当に存在するとしても、主体がそれを用いて何かを知覚するということが成立するには、エコロジカル情報をまさに環境のありように関する情報として利用することを可能にするような、主体側のなにがしかの理解や知識などが必要なのではないだろうか⁴。そして、もしそうだとすると、それらの理解や知識などを説明するのに、何かしら主体内部の表象的状态のようなもの（e.g. 記憶という表象的状态）に言及する必要はないのだろうか。

もしかすると、（年輪の場合などと違って、）包囲光のようなエコロジカル情報とそれが特定する環境内のレイアウトの場合には、主体側の知識や理解が不要となる特殊な事情があるのかもしれない。あるいは、知識や理解、記憶などを認めても、それは、エコロジカル・アプローチにとってまずいもの（主体内部の「計算」や「表象」を含むもの）ではないということなのかもしれない。それらの点を説明してほしい。

（２） についてももう少し説明する

二つ目の疑問は、情報をピックアップするということは、主体自身が情報に意識的に気づくことを含むのか、あるいは、そうではなく、もっぱら意識下で行われることなのかというものである。これに対してどう答えるかによって、エコロジカル・アプローチは、かなり異なる知覚観を提示していることになるのではないと思われる。

まず、ピックアップは、情報についての意識的な気づきを含むとしてみよう。する

4. 関連しそうなポイントとして、「郵便ポストを郵便ポストとして知覚する」ということはエコロジカル・アプローチではどう説明されるのかという問題が論じられている箇所（５章の６節）で、ポストを知覚する（ポストを特定する情報をピックアップする）ことができるようになるためには、郵便制度に関する主体の知識（の習得）が必要であることが認められているように見える（ただし、その知識は、非知覚的な概念的知識ではない——少なくとも、そうとは限らない——ということが強調されている）。したがって、少なくとも、情報のピックアップに主体側の知識や理解が関わる場合があるということは認められているようである。私の上の疑問は、この点は、果たして、郵便ポストのような事例にだけ認められることなのか、情報のピックアップ全般に関して認められることなのか、もし広範に認められることであるなら、それらの知識や理解とはより具体的にはどういうものであり、またそれらを認めることは表象を認めることを含まないのか、ということである。

ついでに、私の疑問をより明確にするために述べておくと、ポストに関する議論において染谷が論争相手として念頭に置いているのは、「郵便ポストを特定するような光学的情報など存在せず、それゆえ、ポストは、非知覚的な概念的知識に依拠して捉えられるのであって、本当には、あるいは、直接には知覚されていない」と考える人たちである。他方、私が上で問題にしたいことは少し違って、「あるものを特定するような情報が実際に存在し、また主体はその情報をピックアップすることで問題の事物を知覚しているのだとしても、そのことが可能であるためには、主体側の知識や理解が働いている必要はないのだろうか」ということである。

と、エコロジカル・アプローチの知覚観によれば、「知覚主体は、環境内のレイアウトではなく、それを特定するエコロジカル情報という一種の表象（と言ってよいのだろうか？）に意識的に気づき、それによって（とおそらく言ってよいだろう）、環境内のレイアウトに気づく」ということになりそうである。このような知覚説は可能であろうし、そんな説はダメだと検討もなしに即断するつもりはない。しかし、この説が、「直接知覚説」という看板にどれだけふさわしいかという点については、なにがしかの説明が必要かもしれない。確かに、エコロジカル情報はセンスデータなどとは違い、環境内に実在する存在者であるから、この知覚観によれば、「内的なものから外的なものに到達する」というような考え方は退けられるのだろう。しかし他方で、「主体はともかく知覚対象そのものとは別の何かに意識的に気づくことによって、知覚対象に（も間接的に？）気づく」という構造に関しては、この知覚観は、センスデータを指定するような知覚観と似ているのではないだろうか。

他方、ピックアップは意識的な気づきを含まず、主体の意識下で行われる作用であるとしてみよう。すると、この場合には、意識下でエコロジカル情報がピックアップされる一方で、主体自身は、直接に、一切何も介さずに、環境内のレイアウトそのものに意識的に気づくのだ」と（「直接知覚説」の看板にふさわしく）主張しうる余地があるかもしれない。しかし、この場合、そのように言える余地はあるとしても、もっぱら意識下での情報のピックアップのみを強調している（ようにみえる）エコロジカル・アプローチは、それ自身としては、主体自身による意識的な気づきについては積極的に語っておらず、それゆえ、知覚経験全体に関する完全な説明を与える理論ではない、ということにならないだろうか。意識的な側面も含めた知覚経験全体を説明するためには、エコロジカル・アプローチは、環境内のありように関する主体自身の意識的な気づきがどういう種類のものであるのか（「見知り⁵⁾」のようなもののなのか、あるいは、一種の志向的な気づきなのか）、そしてまた、意識下における情報のピックアップは、そのような意識的な気づきといかなるかわりを持つのか、などについて述べなければならないのではないだろうか。

意識的な気づきに関する以上の疑問は、「エコロジカル・アプローチでは、知覚的经验の「現象的性格 (phenomenal character)」はいかなるものとして理解されることになるのか」という疑問と結びつく。次にその点を見ることにしよう。

5. ある存在者についての見知り (acquaintance) とは、その存在者の実在を含意する、関係的で非表象的な気づきであるとされる。

1.2 現象的性格について

ある心的状態や出来事の現象的性格とは、「その状態や出来事を持つ主体自身にとって、それを持つとはどのようなことであるか」ということ——大雑把には、その状態や出来事の意識的側面——に関わる、状態や出来事の特長である。そして、知覚経験は、信念や判断などと同様に、世界のありよう「についての」ものである一方で、信念や判断にはない、独特の（質的で感覚的な）現象的性格を持つと言われる⁶。たとえば、私が机の上のリンゴについての知覚経験を持つときには、リンゴが机の上にあると単に信じる場合とは違って、リンゴやその赤さが、まさにそこにあるものとして、私にありありと「現前する」というような言い方がなされる。

この知覚に特有の現象的性格をいかなるものとみなすのかということが、現在の（そして、おそらく昔からの）知覚の哲学の中心的問題の一つとなっている。かつては、知覚の現象的性格は、センスデータやクオリアなど、心的で主観的な何かから構成されると考えることが当然視されていたが、このような考え方は現在では人気がない。たとえば、「志向説（Intentionalism）」という立場では、知覚経験の現象的性格は、知覚経験によって表象される知覚対象やその性質によって決定される、と主張される。また、「素朴実在論（Naïve Realism）」（「関係説」）という立場では、現象的性格は、主体が見知りの関係に立っている実在の知覚対象やその性質そのものから構成されるとされている。（志向説や素朴実在論の主張からわかるように、「現象的性格」について語ることは、必ずしも、クオリアやセンスデータなどに加担すること含まない。）

以上を踏まえて、私の疑問は以下のようなものである。

（3） エコロジカル・アプローチによれば、知覚経験の現象的性格はいかなるもの（何からなるもの）とみなされるのか。

現象的性格は、ピックアップされるエコロジカル情報から構成されるのか（ピックアップが主体による意識的な気づきを含むとしたら、そうなりそうにも思われる）、あるいは、環境内のレイアウトそのものからなるのか（「直接知覚説」というフレーズが一番ぴったりくるのはこちらであろう。しかし、この場合、エコロジカル情報がピックアップされるということは、現象的性格とどうかかわるのか）。または、エコロ

6. こう言うことは、必ずしも、信念や判断には現象的性格がないということを含意しない。信念や判断も現象的性格を持つかもしれないが、しかし、それらの現象的性格は、知覚が持つ質的で感覚的な現象的性格とは異なるということである。

ジカル・アプローチは、現象的性格などというものは認めないという立場なのだろうか。いずれにせよ、現象的性格は、私になじみのある問題設定では重要なポイントと考えられているから、この点に関連するエコロジカルな知覚観のスタンスをより明らかにしてほしい。

以上の疑問は、「現象的性格」や「意識的な気づき」など、きわめて「哲学的」な概念に依拠したものである。したがって、エコロジカル・アプローチの観点からは、そもそもそのような概念は受け入れられないということになるのかもしれない。もしそうなら、なぜそれらの概念が問題であるのかを説明してほしい。

2. 第八章「知覚錯誤問題」の批判的検討

本書の第八章では、「知覚は誤りうる」という一般に広く受け入れられているテーゼ（以下、「錯誤論」）が、「知覚は表象的である」というまずい結論を招くものとして退けられる。具体的には、まず、「知覚（動詞）は達成（動詞）である」ということに基づく「知覚錯誤解消論法」（以下、「解消論法」）が、知覚錯誤の不可能性を端的に示す、論理的ないし文法的論証として提示される。その後、その論証に依拠しつつ、知覚の誤りの実例とみなされがちな具体的な諸現象が詳しく検討され、それらが知覚の誤りとは言えないことが主張される。

しかし、まず、「解消論法」に依拠した錯誤論批判は、少なくとも今のままの形では、そもそも敵である錯誤論者の主張を見誤ってしまっているため、説得的ではないと私は考える。また、後半の具体的な現象に関する考察には、興味深い考察や注目すべき洞察が見いだされるものの、重要な点で解消論法から受け継がれた問題のある（と私には思われる）議論設定に依拠しているため、結局のところ、全体として十分に説得的とは言えない。以下、これらの点を具体的に述べていく。

2.1 「解消論法」

解消論法は以下のようなものである。

- (1) 「知覚する」、「見る」、「聞く」などの知覚動詞は達成動詞⁷である。

7. 達成動詞（achievement verbs）に関して、染谷は Ryle (1949)の分類法や説明に依拠している。ライルによると、達成動詞（e.g. 「勝つ」）は、「仕事動詞（task verbs）」（e.g. 「走る」）と対比され、後者がある行為（達成のための試み）の遂行を意味するのに対して、前者は行

- (2) 達成動詞は、あるプロセスの成功もしくは完了を意味する。
- (3) したがって、知覚錯誤という言い方は語義矛盾である。なぜなら、「x を知覚する」は「x を知覚してしまっている」を意味しており、知覚錯誤は、「x を知覚してしまっている（知覚に成功している）と同時に、x を知覚していない（知覚に失敗している・まだ知覚していない）」を意味するからである。
- (4) よって、知覚には錯誤など論理的にありえない。 p. 257

この論証の問題点は、結論(4)である。というのは、少なくとも、私にとってなじみのある近年の知覚の哲学では、誰も(4)に反対しておらず、それゆえ、(4)が確立されても、それだけではいかなる立場も退けられないと考えられるからである。「知覚する」（「見る」、「聞く」...）といった動詞が成功した事例にしか適用されないということ——あるいは、知覚が事実含意的（factive）であること——は、現代の知覚の哲学では広く受け入れられている⁸。それゆえ、現代の（おそらく）すべての論者は、知覚が誤るということが論理的にありえないということはすぐさま認めるであろう。

「錯誤論者」が主張しているのは、「知覚（perception）が誤りうる」ということではなく、「知覚的な経験（perceptual experience）が誤りうる」ということである。私にとってなじみの問題設定では、「知覚」（「知覚する」）という語に加えて、「知覚的経験」（「知覚的に経験する」）という語が導入されるのが通例である⁹。後者は、成功した知覚（の場合に生起する経験）と同種の現象的性格を持った（あるいは、少なくとも持っているように主体にみえる）心的出来事を指すが、しかし、その出来事が veridical であり、外的世界との接触に成功しているという含みを持たない用語とみなされる。知覚と知覚的経験の関係は、とりあえずの理解としては、知識と信念の（間に成り立つと広くみなされている）関係と類比的なものと考えればよいだろう。つまり、信念が知識にとって必要ではあるが十分ではないと（多くの哲学者によって）考えられているように、知覚経験は知覚のために必要ではあるが、十分ではないとみなされているのである。以上の対比にもとづくと、錯誤論者が主張しているのは、「知

為の遂行に加えてある事態（e.g. 競走相手があとでテープを切ること）が成立していることを意味する。知覚に関して言えば、たとえば、「見える（see）」が達成動詞であるのに対して、「目を向ける（look at）」は仕事動詞であるとされる。

8. ただし、これが日本語（あるいは、英語など他の自然言語）の日常的な用法なのかどうかは私にはちょっとわからない。少なくとも日本語では、「幻覚を見る」（あるいは、「幻覚が見える」）、「幻聴を聞く」（「幻聴が聞こえる」）は十分に意味を成しているようにも思われる。しかし、日常的な用法かどうかは置いて、哲学の議論の中で、「知覚する」を達成動詞として扱おうということに異を唱えるつもりはない。

9. たとえば、Fish (2010), p.3 [邦訳 p. 5].

識は誤りうる」という一見して奇妙なテーゼに相当する「知覚は誤りうる」というテーゼではなく、「信念は誤りうる」に相当する「知覚的経験は誤りうる」というテーゼである。したがって、後者を攻撃しなければ、錯誤論者に有効な一撃を加えたことにはならない。

ここで、反錯誤論者は、失敗と成功を包含するニュートラルな「知覚的経験」などというものを導入することは認められないと主張するかもしれない。このような主張の方針は十分理解できるものである。しかし、この路線を展開するためには、解消論法とは別の議論が必要である¹⁰。そして、残念ながら、染谷の著作の中では、そのような議論は少なくとも十分な形では展開されていない。ただし、幻覚について論じられている箇所に、関連する議論の筋道を見出すことができるので、後でそれを見ることにしよう。

各知覚理論への批判をもう少し具体的に検討してみる

染谷は、以上の基本的な論点を踏まえて、より具体的に、錯誤論の一種とみなされる知覚理論の問題点（とされているもの）を指摘している。その個所について少し検討しておこう。染谷が退けているのは、「代表象的表象主義」と「認知的表象主義」の二つである。前者は、「センスデータ説」（＝知覚経験において、主体はまず最も直接には心的な対象であるセンスデータに気づくという説）と呼んでもよい立場であり、後者は、「志向説」（＝知覚経験は、世界に関する、正しい、あるいは、間違った志向的内容を持つという説）と呼んでもよい立場である。これら二つの理論は、どちらも、「知覚錯誤は知覚の未達成である」というポイントを理解していないものとして退けられている。しかし、これから示すように、その議論は十分に有効（あるいは、フェア）ではないと私は考える。

センスデータ説に関して

まず、センスデータ説が扱われている個所では、次のように言われている。

たとえば、リンゴをミカンと見間違った人は、リンゴを知覚しなかった・リンゴ

10. それらの議論は、具体的には、（錯誤論者が「知覚的経験」というカテゴリーを指定する主な理由は、知覚と錯誤がよく似た現象的性格を持つということであるから、）①知覚と錯誤は、実際のところ、現象的性格において（それほど）類似していないのだと言うか、あるいは、②現象的性格の点で似ているからといって、知覚と錯誤を同じ「知覚的経験」としてまとめてよいことにはならないと主張する、というようなものとなるだろう。後で触れるように、ある種の幻覚に関しては、染谷は①の路線を示唆していると理解することができる。

をまだ知覚していない（…）のであって、このときいったい何を知覚していたのかと問うことはそもそもできない。（…）リンゴ知覚に到達していないのに、あたかも到達したかのように扱い、そこで何が知覚されていたのかを問うこと自体が転倒しているのだ。

知覚の代表的表象主義者 [= センスデータ論者] は、このような問いを執拗に問い続け、非実在的な心的リンゴの知覚を達成した（…）という解答を無理やりに捻り出していたのである。 pp. 259-260. ([] 内引用者)

しかし、センスデータ説論者は、必ずしも、リンゴの知覚が失敗したときにも、実在の物理的なリンゴが「知覚される」と言われるのと同じ意味で、何かリンゴらしきものが「知覚されて」いたのだと主張する必要はない。彼らは、たとえば、リンゴの幻覚において、主体は何も知覚していなかったのだが、それでも何か、つまり、センスデータを感覚して (sense) いたとか、あるいは、センスデータが主体に現われていたと主張することができる¹¹。そして、それらのことによって知覚的経験が生じていたとセンスデータ論者は考えるのである。つまり、センスデータ論者は、外的世界との接触としての「知覚すること (perceiving)」と、センスデータを「感覚すること (sensing)」を区別できるし、また、洗練されたセンスデータ論者なら、そうしてきたのではないと思われる¹²。

そして、(センスデータ説には同意できなくても、) なぜ彼らが、知覚に失敗した場合にも、主体は「センスデータを感覚していた」といったようなことを言いたくなるのかは、私には十分理解できるように思われる。つまり、彼らがそう主張したくなるのは、外的な事物の知覚に失敗した場合にも、それでも、主体は確かに何かに現象的に気づいていた——単に考えられたり、信じられたりするのとは異なる仕方で、何か現われていた——ように思われるからであろう。センスデータ説は現在では人気のない説であり、私も特に賛成したいわけではないのだが、しかし、この説を動機づけていたこの点は、今も真剣に考察すべきものだとは私は考える。この点について何か有効なことを述べなければ、センスデータ説 (のもちうる魅力) に十分対処したことにはならないであろう。

11. もちろん、センスデータ説が持ちだすかもしれない、「感覚する」というような心的作用が果たして何であり、それは受け入れられるものなのかということとは問題になるであろう。しかし、その検討のためには、解消論法から独立の議論が必要である。(そのような議論の末に、「感覚する」は結局のところ「知覚する」と同じ意味にしかならないことが示されるなら、それは、センスデータ説に対する説得的な反論となるであろう。)

12. cf. Fish (2010), pp. 16-7[邦訳 pp. 25-6].

志向説に関して

志向説については、次のように述べられている。

知覚錯誤は端的に達成ではない。したがって、どのようにして「錯誤知覚が生じる（達成される）のか」とか、どのようにして「誤表象が生じる（達成される）のか」という問題自体がそもそも成り立たなくなる。したがって、認知的表象主義者 [= 志向説論者] のように、(…) 誤った内容を持つ表象状態を知覚錯誤と見なし、その成立機構を問うことはそもそもできなくなる。p. 260 ([] 内は引用者)

この個所に関しては、一文目の「知覚錯誤は端的に達成ではない」というところが問題ではないかと私は考える。というのは、解消論法に基づくそれまでの考察から言えるのは、知覚錯誤（とされる錯覚や幻覚）は知覚の達成ではないということだけであって、知覚錯誤が、「端的に」、いかなる意味でも、達成ではないということではないと考えられるからである。（ここで、もし暗に、「知覚は達成である」と「錯誤は知覚ではない」から、「錯誤は達成ではない」が導かれているのだとしたら、それはまずい議論である。）たとえば、敗北は、勝利が達成されないことではあるけれども、少なくともあるケースでは、別の何か（e.g. 試合を戦うこと）の達成ではあると言いうる余地は十分にあるように思われる。そして、それと類比的に、錯覚や幻覚は、知覚の達成ではないけれども、他の何かの達成とみなすことができるかもしれない。たとえば、志向説論者なら、錯覚や幻覚は、世界との接触という点では達成ではないが、主体が世界に関するある内容を抱くということ、（そしてまた、それによって知覚的経験をもつということ）に関しては達成であると主張するであろう。上の箇所に至るまでの考察によっては、志向説論者が、知覚錯誤が後者の意味でも達成ではないことを受け入れなければならない理由は明らかになっていない。

2.2 具体的事例に関する考察について

染谷の議論は、上の（「アームチェア的」な）解消論法に尽きるわけではなく、より経験的な考察にまで踏み込んでいる。たとえば、ミュラー・リヤーの錯視図形や半分水に浸かった棒など、一見すると誤りを含んでいると言いたくなる豊富な具体的事例に関して、詳細な検討がなされている（私が以下で取り上げるのは、あくまで、その一部——特に、私には問題があると思われる箇所——だけであることを断って

おく)。そして、それらの検討には、興味深い点や洞察が含まれている。しかしながら、それらの事例に関わる議論は、いくつかの重要な局面で、解消論法によって与えられたまづい（と私には思われる）設定に依拠しているために、錯誤論を全面的に退けることには成功していないと考えられる。

まづいと思われるその議論設定とは、錯誤論者は（「知覚が誤りうる」と言っているのだから）、「知覚は達成されているにも拘わらず、誤っている場合があるということを示さなくてはならない」（p. 265、下線は引用者）という設定である。染谷は、「知覚は達成である」というテーゼを、エコロジカル・アプローチの観点からより具体化し、「知覚とは、主体が、必要なエコロジカル情報を取得するために、十分な時間をかけて、適切な身体的探索や調整を行うというタスクの達成である」というテーゼとしてさらに展開している（pp. 261-3）。したがって、染谷によれば、錯誤論者は、知覚主体が十分な時間をかけて、心ゆくまで身体的な探索や調整を適切に行い、情報をたっぷり取得したにもかかわらず、それでもなお誤りが残り続けている事例が存在すると主張しなければならないとされる。この議論設定では、ある時点や、ある一定の間、誤った（と言うのがごく自然な）経験が生じただけでは、錯誤論が正しいことにはならないのである。

しかし、そもそも錯誤論者が、達成としての知覚が誤りうると主張しているというのは誤解であった。したがって、錯誤論者は、見るからに不利そうなこの議論設定を退けることができる。つまり、錯誤論者は、主体が関連する情報を十分に取得し終えたうえでの誤りを示す必要はなく、ある時点、あるいは、不自然に短すぎないある一定の時間幅の間、主体を欺くような知覚的経験が生じている事例を示すことができる。彼らの主張を根拠づけることができるのである。以下、具体的な例に即してこの点を見てみよう。

例1 エイムズの部屋

エイムズの部屋という錯視——部屋のゆがんだ構造によって、中にいる人物が大きく、あるいは、小さく見える錯視——に関して、こうした錯視は、主体の探索行動が人為的に封じられた極めて不自然なケースで生じるものだから（たとえば、知覚者はその部屋をのぞき穴から見ることにしか許されないそうだ）、「知覚が（十分に適切な意味で）達成されたうえで、誤っている」というケースとは言えず、それゆえ、錯誤論者が示さなければならない錯誤の事例ではないとされる（pp. 278-280）。十分な探索（部屋の中に入ってみるなど）が遂行されたときに、そこで初めて本来の意味での知覚が達成され、そして、そのときにはもはや誤りはないだろうというわけである。

しかし、錯誤論者は、探索が完全に遂行されたうえでの知覚の誤りを示さなければならぬという設定を受け入れる必要はない。彼らが主張しているのは、知覚的経験が誤るということだからである。そして、知覚の達成以前の段階で、すでに、知覚的経験——大きな（小さな）人物を知覚しているかのような経験——が生じていると考えることはもっともらしい。そのような経験が生じているからこそ、知覚者は、たとえば、「こっちの人のほうが、あっちの人よりも大きく見える」といったことを発話するのであろう。また、トリックのことを何も知らない知覚者なら、実際に、「こっちの人のほうが、あっちの人よりも大きい」と間違った判断を下すかもしれない。錯誤論者は、このような誤った判断を引き起こしうる「知覚的経験」が誤っていると主張するのである^{13 14}。

例 2 半分水に浸かった棒

類似の論点は、半分水に浸かった（曲がって見える）棒に関する議論のある部分についても指摘できる（ただし、この例に関する染谷の議論全体は、必ずしもその一点だけにかかっているわけではないことを強調しておく）。そこでは、「水に半分浸かった棒は、知覚者がその棒を水の中で回してみるという十分な身体的探索を行えば、（ほんとうに曲がっている棒とは明らかに異なる見え方をするので、）まっすぐであ

13. ただし、反錯誤論者は、ここで、「知覚的経験が誤った判断を引き起こすからと言って、知覚的経験自体が誤っているということは帰結しない」と頑張ることはできる。つまり、エイムズの部屋において人物が小さく（大きく）見えること自体は、その場で起こるべくして起きる適切な事柄であって、何ら誤りではなく、ただ、そこから「あの人物は小さい（大きい）人である」という判断を形成するところにのみ誤りが生じるのだ、というわけである。知覚的判断と知覚的経験そのものをはっきり区別し、後者は決して誤らないと主張するというやり方は、一部の「素朴实在論」が取る方針である（たとえば、Brewer (2011)を見よ。また、このタイプの反錯誤論の検討については、たとえば、Millar (2015)を見よ）。しかし、こういった（知覚と判断を峻別し、知覚を誤りの可能性から救おうとする）タイプの反錯誤論は、「情報を十分に取得したうえでの知覚の誤りは存在しない」という染谷が展開している反錯誤論とは基本的発想を異にするようにもみえる——染谷はつまるところ、「知覚者が正しい知覚的判断（あるいは、知覚的再認（recognition））に到達するまでは、正誤を問うことのできる知覚（的経験）は成立しない」と主張していると理解することもできるように思われる。

14. 染谷は、エイムズの部屋や、あるいは手品・奇術などにおける錯覚について、これらの情報探索が人為的に封じられたあまりに不利な状況で知覚（的経験）の錯誤を言い立てることは不当である、と考えているようだ。それは、知覚（的経験）を「生の文脈から引き剥がす」ことであるというのがポイントであろう。確かに人工的な錯視は、不自然な設定に依拠していると言えるのかもしれない。しかし、日常的、実践的な場面でも、いつも必ず十分な心ゆくまでの情報探索が可能であるとは限らないであろう。それゆえ、理想的な場面での知覚（的経験）のみについて正誤を問題にするならば、それもまた、別の仕方で知覚（的経験）を「生の文脈から引き剥がす」ことではないだろうか。

ることが知覚的に明らかになる」と述べられている。この主張の意味するところは、「たとえ棒を回す以前の段階では、棒に関する視覚経験は誤りであると言いたくなくとも、棒を回すという十分な探索運動が完了し、知覚がほんとうに達成された段階では、すでに誤りはない。したがって、この事例は、錯誤論者が示さなければならない、「知覚が達成されたうえで間違っている」という事例ではない」ということだと考えられる。

棒を回せば、まっすぐであることがわかるという話は興味深い。しかし、そのことに依拠して錯誤論を退けるのは難しいであろう。なぜなら、錯誤論者は、棒を回すという探索行動が完了したうえでの誤りというものを提示しなければならない、という問題設定を拒否できるからである。錯誤論者は、棒を回す以前にすでに、知覚的经验が生じていて、そして、それは間違っていたのだと言うことができる。

例3 ガラスにぶつかって死んだ人

また、ある人がガラスのドアを空気と「見間違え」て（ととりあえず表現しておく）、ガラスに衝突し、死んでしまったというケースも取り上げられている（このような、自説にとって扱いの難しそうな事例も取り上げられているところは、本書の美点であろう）。この場合、その個人がその後知覚を達成することはもはやありえないが、それでも、これは、錯誤論者が示すべき錯誤の事例ではないと染谷は（大胆にも）主張する。なぜなら、この場合にも、知覚はまだ達成（完了）に至っておらず、その後、他の人たち（場合によっては何世代か後の人たち）が、たとえば、ガラスに彩色することなどによって、ガラスの知覚に成功するときに初めて本当の意味で達成に至る、と考えることができるからである。

しかし、「個人の死を超え、集団によって（何世代か後に）初めて知覚が達成されるのであって、それまでは経験に誤りを帰属させてはならない」という主張は、錯誤論者なら当然退けるであろうし、また、一般的に言っても、（そう言えば、錯誤論を退けられるという以外に）支持する理由や動機があるかどうか怪しいアドホックな主張ではないかと思われる。あるいは、たとえ（言葉の上で）そう主張したとしても、そのときには、知覚（的经验）は誤らないということの实质はほとんど失われてしまっているのではないだろうか（染谷の論法は、負けを認めないために、試合時間を際限なく延長したり、土俵をどんどん拡張したりすることとどこか似ているようにも思われる）。

十分な探索の完了以前の知覚的经验に誤りを帰属させるということに対しては、それは、瞬間的な経験の断片をスナップショットのように不自然に切り出してきて、

それが誤っていると言っているに過ぎない、というような反論がなされるかもしれない。しかし、今見たガラスの例は（あるいは、水に浸かった棒の例もそうだと私には思われるが）、日常的、実践的な観点から見ても十分に妥当な時間幅やまとまりを有する経験に誤りを帰属させることが自然でもっともなケースがある、ということを示しているように思われる。

2.3 幻覚について

経験的事例に関する検討の中で、幻覚や幻聴についても考察されている。その考察には、これまで触れたのとは異なる論点も含まれているので、その点についてもコメントしておきたい。幻覚に関する染谷の主張のエッセンスは、幻覚は「そもそも知覚経験ではない（p. 272）」というものである。知覚経験ではないのだから、誤った知覚経験でもないというわけである。（なぜかこの個所では、「知覚」ではなく、「知覚経験」という言葉が出てきており、興味深い。）まず注意しておきたいのは、ここでも、幻覚が「知覚経験ではない」ということで意味されていることの一部は、幻覚が、世界との接触の達成としての「知覚」ではないということであるようにみえるということである（「リアリティのテスト」（pp. 274-5）の部分など）。そして、そのことは、これまで見てきたとおり、錯誤論者も含め、誰もが認めることであるから、錯誤論者に対する有効な反論にはならない。しかし、他方で、幻覚が「知覚経験ではない」ということで意味されていることには、（上で導入した用語で言うと、）幻覚が知覚的経験ですらない——つまり、知覚と一つのカテゴリーのうちにまとめられるような種類の経験ではない——ということも含まれている。これは、新しい論点なので、その点を検討してみよう。

染谷のポイントは、「現実にかかる幻覚の事例に目を向けてみれば、幻覚と知覚は、経験主体自身によって区別されており、したがって、幻覚と知覚は質的・現象的な点で区別される異なった種類の経験である」とまとめることができる。哲学者はしばしば、実際の知覚と区別できないような幻覚について語るけれども、たとえば、幻覚を持つ統合失調症患者のふるまいや報告を調べてみれば、彼らが幻覚と知覚を異なるものとして区別していることが判明する。このことは、彼らの持つ幻覚は、知覚とは異なる質的・現象的な特徴を持っていることを示しており、それゆえ、幻覚と知覚を同じ「知覚的経験」に属するものとしてまとめることはできない、というわけである。

これも興味深い指摘を含んだ議論である。しかし、それによって錯誤論者を退けることができるかどうかはあやしい。

検討されている幻覚の実例は十分か

まず、現実には生じる幻覚として言及される事例が、（あらゆるタイプの）幻覚が知覚と異なる種類の経験だという結論を保証するには、やや乏しく、ひょっとすると偏っているかもしれない。確かに、統合失調症患者などが持つ幻覚や幻聴は、染谷（または、染谷が言及するメルロ＝ポンティ）の言う通り、知覚とは異なる種類の現象的性格を持つのかもしれない。たとえば、それらの幻覚や幻聴は、一種の想像や記憶イメージであって、実のところ、知覚のようなリアリティを欠いているのかもしれない。しかし、私の知る限りでは、たとえば、シャルル・ボネ症候群という症例に見られる幻覚——精神疾患によって起こるのではなく、視力の著しい低下の後に起こる幻覚¹⁵——は、本当に知覚しているかのようにありありとした、詳細なものであり、幻覚の対象は、手を伸ばして触れられるかどうかを確かめなければならないほど、実際の対象と区別するのが困難な場合もあると言われている¹⁶。また、ffytche によると、このタイプの幻覚が生じるときには、（想像時に活動する前頭葉、頭頂葉、内側側頭葉ではなく、）視覚に関わる脳領域に活動の変化が見いだされ、さらに、色の幻覚が生じる場合は、色知覚に特化した領域が活動し、顔の幻覚が生じる場合は、顔知覚に特化した領域が活動するというように、幻覚の内容は、活動する脳領域が何の知覚に特化しているかに対応しているそうである¹⁷。これらのことから、このタイプの幻覚は、知覚と同種の経験とみなすのがもっともだと主張されている¹⁸。（また、シ

15. このような幻覚は、視覚的なインプットの欠如のせいで脳の自発的な活動が引き起こされることで生じる、と考えられているようだ（ffytche (2013), p. 54）。

16. ffytche (2013), p. 50. ただし、Sacks (2012)の第1章によると、多くの場合、幻覚の内容が現実にはありそうもないものであったり、場違いであったりするために、患者は自分が見ているのは幻覚だとわかるそうである。しかし、このことは、このタイプの幻覚と正常な知覚が、質的・現象的な点ではそっくりであることと両立すると考えられる。そして、実際、幻覚の内容がその場の状況にあっている場合には、現実と受け取られることもあるとのことである（Sacks (2012)、邦訳 p. 23）。（また反対に、患者が現実に見ている光景を幻覚と間違えるケースもあるらしい。「患者の一人は、19階にある部屋の外に男性が浮かんでいるのを見て、これもまた幻覚だと思い込み、男性が彼に手を振っても振り返さなかった。実は「幻覚」は窓拭き作業員で、親しみを込めて手を振ったのに無視されて、かなりムツとしていた。」（Sacks (2012)、邦訳 p. 46）

17. これらの点について、私はもっぱら ffytche (2013)に依拠しているが、しかし、想像と相関する脳領域と知覚と相関する脳領域の区分については論争があり、ffytche が想定しているように見えるほど、両者ははっきり分けられないかもしれないという点を付け加えておく（この点は、新川拓哉氏の指摘による）。

18. ffytche (2013). 他方で、ffytche によると、統合失調症患者の幻覚の場合には、視覚に関わる領域も活動しているが、同時に記憶に関わる領域も活動しているようだとのことである。ffytche は、異なるタイプの幻覚の間の相違を指摘したうえで、すべての幻覚を同種のものとして扱うことに対して疑問を呈している。また、源河(2017), pp. 55-6 は、「幻覚論法」を補強する事例としてシャルル・ボネ症候群に言及している。

ャルル・ボネ症候群の「嗅覚版」とも言えるようなおいの幻覚も存在するとのことである¹⁹⁾。

現実の幻覚は、知覚と異なる種類の経験であると結論するためには、こういったケースも調べるべきではないだろうか。現段階では、現実の幻覚すべてが知覚と質的・現象的に異なる別種の経験だという点について、私はまだ説得されていない。

可能な幻覚と「幻覚論法」について

また、たとえシャルル・ボネ症候群も含め、現実には生じる幻覚はすべて、知覚とはどこか質的・現象的に異なっていて、知覚的経験とみなせるか怪しいとしても、錯誤論者たちには、まだ、知覚と見分けがつかない（したがって、「知覚的経験」とはつきり呼べる）幻覚が可能であると主張する余地がある²⁰⁾。そして実際に、染谷も言及している「幻覚論法」を提起する哲学者たちは、ふつう、自覚的に、知覚と見分けのつかない幻覚の可能性について語っている。（彼らは、現実の幻覚がしばしば知覚と見分けがつくものであることは認めている。）

そのような幻覚が可能だということまで否定するのは難しいように思われる。私が今机を正しく知覚しているとしよう。すると、私がそれと見分けがつかない経験を持っているが、しかし、机がそこになかったというシナリオを不可能にするものはないように思われるからである。あるいは、知覚と見分けがつかない幻覚は、シャルル・ボネ症候群に見られる幻覚など、現実に見いだされる幻覚の事例からの自然な延長として十分理解可能だ、と主張することもできるかもしれない。

そして、（そんな可能性を持ち出して何になると言われるかもしれないが、）そのような幻覚の可能性は、哲学的な意義を持ち真剣な考察に値する、と少なくとも多くの哲学者は考えている。というのは、その可能性は、知覚（とくに、その現象的性格の）本性や存在論的身分に関して重要なポイントになりうるからである。具体的に言うと、ある成功した知覚と見分けのつかない幻覚が生じうるということは、その成功した知覚と同じ現象的性格を持つ経験が外界の対象や性質がなくても生じうることを支持するように（少なくとも一見したところ）みえる²¹⁾。そして、もしこの点を受け

19. Sacks (2012), ch.3.

20. ここでの「見分けがつかない」は、もちろん、「自分の経験が知覚であるかどうか判明するまでテストや探索を遂行しきったうえでなお見分けがつかない」ということではなく、ある一定の比較的短い間（といっても必ずしも一瞬でなくてもよいと思うが、）自分の経験を反省してみても、知覚か幻覚かわからないということの意味する。

21. 選言説という立場は、知覚経験についての「選言的な捉え方」に基づいて、この一見したところもっともに見える考え方を否定する。しかし、彼らも（まさにそのような仕方で応答する必要があると考えている点で、）知覚と見分けがつかない幻覚の可能性とその哲学的

入れるなら、成功した知覚の現象的性格を、実在の知覚対象や性質そのものからなるものとして説明する（つまり、「素朴実在論」を採用する）ことはできない、ということになるであろう。幻覚からの議論を提示する哲学者たちは、このように知覚経験の現象的性格の本性という哲学的トピックに対して重要性を持ちうるものとして、知覚と見分けのつかない幻覚の可能性に着目するのである。

エコロジカル・アプローチの観点からは、このような単なる可能性を重視する哲学的方法論は退けられるべきなのかもしれない。しかし、もしそうなら、（せっかく幻覚論法のようなトピックに言及するのであれば、）それらのどこが受け入れられないのか、また、自分たちはどのような方法論によっていかなる課題に取り組んでいるのか（そもそも課題が異なっているということはあることだ）、などについて明確に論じるべきであろう。幻覚論法を提示する哲学者たちがどのような仕方でも問題をしようとしているのかを考慮せず、彼らは「根拠のない懷疑をいたずらに膨張させ、大げさな錯覚論法を振りかざしているだけである（p. 275）」と言ってすませるのは、いささか乱暴ではないかと私は思う²²。

な重要性を認めていると言えるだろう。

22. 加えて、話を懷疑論につなげている点で、少々誤解を含んでいるとも言えるかもしれない。問題となっているタイプの幻覚論法を持ち出す最近の哲学者の大部分は、上で述べたように、知覚的経験の現象的性格の本性がいかなるものであるのかという、知覚に関する形而上学的な問いに取り組むために、知覚と識別不可能な幻覚の可能性を考慮しているのであって、そのような可能性から懷疑論 [= 「われわれは外界について知らない／正当化された信念を持たない」という認識論的なテーゼ] を主張しようとしているわけではない。染谷は、知覚と見分けがつかない幻覚を持ち出す哲学者は、懷疑論を主張しようとしていると理解しているようにも読めるのだが、その理解は、少なくとも、近年の論者の多くに関しては、誤解であると思う。（ただし、エコロジカル・アプローチの観点からは、近年の分析哲学に顕著な、知覚の形而上学と知覚の認識論の「分業」こそが、実はまずい方針であると主張することも、もしかするとできるかもしれないが。）

参考文献

- Brewer, Bill. (2011), *Perception and its Objects*, Oxford University Press.
- ffytche, Dominic H. (2013), “The Hallucinating Brain”, in Macpherson, F. & Platchias, D. (eds.), *Hallucination*, MIT Press.
- Fish, William. (2010), *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*, Routledge.
[ウィリアム・フィッシュ著、山田圭一監訳、源河亨、國領佳樹、新川拓哉訳、
『知覚の哲学入門』、勁草書房、2014 年]
- Millar, Boyd. (2015), “Naïve Realism and Illusion”, *Ergo* 2, 607-625.
- Ryle, Gilbert. (1949), *The Concept of Mind*, London: Hutchinson. [ギルバート・ライル著、
坂本百大 ほか訳、『心の概念』、みすず書房、1987 年]
- Sacks, Oliver. (2012), *Hallucinations*, Knopf. [オリヴァー・サックス著、太田直子訳 『見
てしまう人びと』、早川書房、2014 年]
- 源河亨 (2017), 『知覚と判断の境界線——「知覚の哲学」基本と応用』、慶應義塾大
学出版会
- 染谷昌義 (2017), 『知覚経験の生態学——哲学へのエコロジカル・アプローチ』、勁
草書房